再び山へ

松濤明

青空文庫

間もなく軍隊に入る。戦争に行く、そして山とは永久にお別れになる——。こうした残り少ない山生活が、なおどれだけの情熱に値するか？

大東亜戦争の始まる頃から、この懐疑は不断にまつわりついて、山へ出かける時にも、山を歩く時にも私を離れなかった。自分の幸福、他の者の幸福——他の者の幸福に基づく自分の幸福……。

軍隊に入る時は、よもや二度と生きて山を歩けるとは思わなかった。それはまた一つの慰めでもあった。自分自身で決断し切れなかった問題を、境遇の変化が強制的に解決してくれることになったから。忙しい軍隊生活の中では、山を思い返す暇はなかった。ほんの断片的な山の印象、山の匂いとか、山の風とか、霜融けの温まりとか、そうしたものはしばしば強烈に甦ってくることもあったが、登攀を回顧させるほど特別なものではなかった。

そうして次第に山を忘れていった。否、忘れたと思っていた。二カ年の南方生活の間はとくにそうであった。

復員したのがこの七月、帰って見れば親父が死んでいつの間にか一家の長となっている。その跡片づけの煩雑さ、忙しさは目の廻るようだった。それでも菜園の手入れをしている時など、木蔭を渡る風のささやきに、ふと、山を想い出すこともあったが、現在の社会情勢からして、家の事情からしても、到底山へは行けるとも思えなかった。今度こそ真から山を諦め、忘れる

ことができると信じていた。そしてそうするように、無意識的な努力をしていた。山の本など倉の奥へしまい込んで。

ある日、私は隣村に通ずる橋を渡って、伯父の家へ急いでいた。今まで貸していた土地の問題について伯父の知恵を借りるために。もう夕暮近くなって、涼しい風が田の面を渡っていた。稲の青い穂が波打って、秋が近づいていた。田園の果に、筑波、加波の山波が夕陽を浴びて黄ばんでいた。その上に、山の高さの数倍の高さに、巨大な積乱雲が盛り上っていた。紅みがかった円い頭は、なおも高く湧き返っているようだった。その姿は突然、私にかつての日の夏の穂高を思い起こさせた。それは烈しい、自分自身でどうにも抑えられぬほどの山への思慕であった。静かな夏の夕暮、人気の絶えた奥穂高の頂きに腰を下している時、ジャンダルムの上に高く高く聳えていた雲は、この雲ではなかったか。そし今もまた、この雲があの穂高の上でひっそりと黙って湧き上っているのではないだろうか。

「山へ行きたい」、「穂高へ行きたい」。もう用件も何もあったものではない。すぐ家へ帰って、ルックを詰めて……。よほどのこと、私はそうしようかと思った。

だが母の顔、伯父の顔、弟や妹のこと等を思い浮かべると、そうすることはできなかった。

「俺は今山を想っているのではない。自分のかつて山で過した楽しかった日を懐しんでいるのだ。それに違いない、それに過ぎないのだ……」そう思って自分を見詰め返して見た。そしていくぶん落ちつきを取りもどした。

「自分は山を離れなくてはいけない。いつまでも山に執着することは自分を幸福にする途ではない」その後も、しばしばこうした事は起こった。しかしそのつどそれは抑えつけ、そして抑え付けることもできた。自分の本当の幸福ということのために……。だがこうして諦められると思った山が、所詮(しょせん)自分とはどうしても切り離すことのできない存在であることを、一方では次第に肯定するような気もした。そして結論はその方に落ちついた。東京へ出て、昔の山仲間が焦土の中での都会生活が無味なものになっただけに、元気で山を忘れず、むしろそれを一層美しい夢として、今もなお思慕している姿に接してからのことであった。

（昭和二十一年十二月二十五日）

青空文庫情報

底本：「風雪のビバーク」二見書房
　　1971（昭和46）年1月12日初版発行
入力：ゼファー生
校正：門田裕志
2005年2月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

再び山へ

松濤明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/